

横浜市立大学附属病院 (横浜市金沢区)

小野田雅仁

横浜市立大学附属病院は、横浜市金沢区の横須賀市寄りに立地しており、八景島シーパラダイスのすぐ近くに位置します。皮膚科外来の診察室から外を眺めると、南西には八景島シーパラダイスが、西を見ると晴れた日には富士山が見え、とても眺望のよい立地環境です。これから当院と当教室の診療・研究の近況についてご紹介させていただきます。

■横浜市立大学附属病院について

当院は、平成3年7月に「横浜市立大学医学部附属病院」として開院しました。平成17年には地方独立行政法人へ移行し、「医学部」がとれ「横浜市立大学附属病院」と名称が変更になっています。横浜市内唯一の特定機能病院としての役割を担っています。

一般病床数は577床あり、28診療科により構成されています。最近ではHCUの新設も決まっております。これまで以上に救急医療に力を入れています。

■皮膚科学教室について

平成21年度は、池澤善郎教授を筆頭として教員7名、指導診療医2名、後期研修医7名、常勤的非常勤1名、博士課程の大学院生7名、修士課程の大学院生4名という体制でした。とても大所帯で若い力で溢れています。「修士課程」は聞き慣れないかと思いますが、医学部以外の学部を卒業した学生が修士課程に入学して、2年間皮膚科学教室の研究室で博士課程の大学院生とともに研究をしています。

外来診療につきましては、大学病院という特性上、専門外来が充実しています。週3回の一般再来、毎日午後の外来手術のほかにも専門外来として、アトピー・蕁麻疹外来（火曜AM・火曜PM・木曜AM）、腫瘍外来（月曜AM）、プリックテスト外来（火曜

AM）、リンフォーマ・化学療法外来（火曜AM）、水疱症外来（火曜PM）、パッチテスト外来（火曜PM）、乾癬外来（水曜AM）、褥瘡回診（水曜PM）、毛髪・色素外来（木曜AM）、膠原病・脈管外来（木曜PM）があります。平成21年12月のデータを見てみますと、1日平均初診患者数は約10名、1日平均外来患者数約130名となっています。

最近の新しいニュースとしましては、昨年の年末にドイツ製の全身照射型のナローバンドUVBの機械が入りました。これまでは全身を照射する場合、小さな機械を使って4面照射をしていたためにも時間がかかりましたが、これによって大分時間の短縮を図れるようになりました。乾癬の光線外来は、これまで待ち時間が長く苦情の的でしたが、この機械の出現により苦情が減ってくれるのでは…と考えております。

病棟診療につきましては、皮膚科のベッド数は17床あります。平成21年12月のデータでは、平均入院患者数は16名です。病床利用率は90%強ですが、平均在院日数は17日台と以前より短くなってきています。とかく「皮膚科は慢性的な病気が多く、入



大学の中庭にて。筆者は前列左端

院期間が長い……！」と言われがちですが、病院全体の平均在院日数とほぼ変わらなくなってきています。診ている疾患は、重症薬疹をはじめとするアレルギー疾患、悪性腫瘍、食物アレルギーなど原因同定のための検査、膠原病、水疱症、難治性皮膚潰瘍など…本当に多彩です。病棟医長を中心に、2グループ制で診療を行っています。入院手術は毎週水曜に中央手術室で行っています。

研究面につきましては、アトピー性皮膚炎・蕁麻疹の研究をしている人、薬疹・接触皮膚炎の研究をしている人、皮膚筋炎・強皮症・水疱症・乾癬・脱毛症など膠原病・自己免疫性皮膚疾患の研究を行っている人、メラノーマや乳房外パジェット病など悪性腫瘍の研究を行っている人など様々です。誌面の都合上、個々の研究についての説明は省略させていただきますが、特に「アトピー性皮膚炎とセマフォリン3A」については、2008年7月に「かゆみの抑

制物質を横浜市立大の研究グループが発見 アトピー治療薬に期待」との内容で毎日新聞にも掲載されました。詳細につきましてはご興味のある方はぜひ、Yahoo!などのインターネット検索エンジンで「横浜市大 セマフォリン アトピー」と入力してみてください……と思います。

この記事が「神皮」に掲載されるのは、7月と伺っております。この記事を書いているのは2月ですが、4月には医局長を内田敬久先生に引き継ぐ予定になっています。4月からの1年は、主任教授である池澤善郎先生の退官前最後の1年です。7月には、当科の今年的一大イベントである「第15回ラテックス研究会、OASフォーラム」が開催されることになっています。この1年がよりよき実りあるものになるように、教室員一同頑張っていこうと思っておりますので、今後とも何卒ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

小田原市立病院 (小田原市)

水野 尚

小田原市立病院は昭和33年6月23日、診療科目9科、総病床数110床を備えて開設されました。その後改築工事を繰り返し、昭和47年には345床まで増えましたが、施設の老朽化、狭隘のため高度医療機器の導入が困難となり、看護師不足も加わって、昭和49年には5病棟が3病棟に縮小されました。このため昭和50年1月、市立病院運営審議会が設置され昭和54年12月には市立病院の全面改築が決まり、昭和59年4月には総病床数は現在と同じ417床となり、昭和60年3月には改築工事も完了し、ほぼ現在の建物となったようです。診療科目はその後も少しずつ増え、現在は25科となっています。平成17年には病院機能評価の認定も受けています。平成18年よりPET-CTが導入され、平成21年4月より救命救急センターが開設されました。昨年で創立50周年をむかえています。

場所は小田原駅西口から徒歩で15分くらいのところにあります。バスもありますが本数は少なめで

す。小田急線で小田原駅から1つ目の足柄駅や大雄山線の井細田駅からなら徒歩で5分くらいです。夏はアユ釣りや有名な酒匂川を中心とする足柄平野の東南部に位置し、北は大山などの丹沢山系、西は金時山や箱根の山々や早川、東は酒匂川、南は相模湾に囲まれ、早川漁港も近く、豊かな自然に恵まれている半面、東海道新幹線や東海道線、小田急線、大雄山線、箱根登山鉄道などの交通機関の乗り入れも多く、新幹線に乗れば新横浜まで約15分、東京まで約40分です。このため新幹線で毎日通勤している先生もおり、病院から交通費も出してくれます。小田原城や石垣山一夜城などの歴史的な史跡も近くにあります。

皮膚科は病院開設当時は皮膚泌尿器科として開設され、初代科長は加藤安彦先生でした。昭和43年に泌尿器科と分離し皮膚科として独立し、加藤安彦先生退任後は、片倉仁志先生、相原道子先生、小野秀貴先生、内藤静夫先生、根岸晶先生が科長を務め

られました。昭和59年より医師が2人に増員され、平成17年に形成外科が新設され、皮膚科外来と一緒に外来診療するようになりました。私は平成21年4月より前任の根岸晶先生のあとを引き継いで勤務することとなりました。平成20年度までは常勤医は皮膚科2人、形成外科1人でしたが、平成21年度にはそれぞれ4人、3人となり、それに伴い外来が手狭となったため診療スペースを待合室の方に拡張する形で増築してもらいました。しかし皮膚科と形成外科の入り口が同じなため皮膚科で呼んだ患者が形成外科の診察室に入ってしまったたり、その逆もあったりしてそのたびに看護師さんや受付の人が右往左往しています。入り口を皮膚科と形成外科とで別々にするようお願いしたのですが、柱の位置の都合上どうしても新しく入り口が作れないとのことでした。医師が増えたのは皮膚科と形成外科だけではなく、小児科は10人、整形外科は7人も常勤医がいます。救急科も平成21年4月に救命救急センターが開設されたのに伴い1人から3人に増えています。看護師の数も多く、7：1の看護体制の認定も受けています。院長先生によると今後更に医師も看護師も増員する方針でいるようです。平成18年には医療費削減政策やマスコミによる医療ミス報道による医療不信の影響で勤務医の労働環境が劣悪化し勤務医の開業が増えたため極端な医師不足になったとのことですが、そのころと比べるとかなり回復してきているように思います。

しかし、一方で内科や外科の常勤医は減少傾向で、特に糖尿病内科の常勤医が1人しかいないため、糖尿病の新患は受け付けておらず、院内の併診もできないため、糖尿病のある帯状疱疹や蜂窩織炎の患者が入院してきたときは主治医の開業の先生と相談しながら、治療方針を決めています。神経内科と膠原病内科はありますが、非常勤の先生で外来診療のみで入院は受け付けておりません。血液内科や口腔外



左上：水野、左下：伊藤、右上：磯田、右下：松浦

科はありません。血管外科はあるのですが常勤医は1人のみのため大きな手術はしていません。また病理の医師も1人しかいないため、蛍光染色などの特殊染色などもやってもらえません。皮膚科医が増員され、皮膚生検などの件数が増えても、病理の先生は増員されるわけではないので相対的に病理の先生の負担も増えてしまうのであまり強くお願いすることもできません。今後少しずつ必要性をアピールしていきたいと思っております。腎臓内科も当院になく、透析の必要な患者の入院は基本的におことわりしていたのですが、平成22年度から1人常勤医が増員されました。

小田原市立病院に着任してきてまず最初に感じたのは、患者や開業医の市立病院に対する依存度が思っていた程高くないということでした。小田原市内には中規模の総合病院がいくつかあり、ベテランの開業の先生も多く、市立病院の内科や外科の医師不足の影響もあり、救急患者なども東海大学や平塚の病院に運ばれてしまったという話を時々耳にします。

もっと市民の皆様や開業の先生方に頼りにしていただけるよう改善していきたいと思っております。

○概要

当院は新丸子駅と武蔵小杉駅の間、東横線の西側に位置する。昭和12年(1937年)6月に日本医科大学付属丸子病院をして開院され、その後、付属第二病院として長く親しまれてきたが、平成18年、日本医科大学武蔵小杉病院と改称した。皮膚科は昭和13年1月に丸山千里先生が皮膚科泌尿器科医長として就任され、その歴史が始まった。3代目部長の宗像敦先生が在任中の昭和42年4月に皮膚科泌尿器科が分離独立した。現在常勤のスタッフは4名、他に、専修医1名・非常勤医師1名で診療にあたっている。

外来患者数は1日100人弱、手術件数は年間約1,000件である。入院は、良性・悪性腫瘍、带状疱疹・蜂窩織炎などの感染症、重症薬疹、水疱症、アトピー性皮膚炎などが多い。

○現状と展望

当科は開設以来70年以上の歴史ある診療科であり、その長い歴史と伝統を踏まえたうえで、大学病院にふさわしい最新の知見と技術を取り入れるように医局員一同努力している。研究・学会方面は、医局員が多忙のためか基礎的研究はおろか臨床研究もままならない状況である。しかしながら、日々の診療で生じた疑問点は日本医科大学本院や他施設へコンサルトを依頼あるいは文献的に十分調査探求し、有益な症例は学会で報告し発表後はできるだけ早く雑誌に投稿することをモットーとしている。

当科の設備であるが、超音波エコーによる画像診断、ダーモスコーピーは外来でルーチンに行っている。また、光線治療機は従前からのデルマレイ200(UVAとnarrow band UVB)に加えて、今春から、DEKA社のEXCILITE-μとLumenis社のIPL装置であるNatuLightを導入した。EXCILITE-μは308nmの波長光を30cm²の範囲に照射し、narrow band UVBと同等以上の効果があるとされている。照射時間が大幅に短縮でき、従来の機器では照射し

にくい顔面や病変範囲の狭いときなどに特に有効であり、白斑・乾癬・アトピー性皮膚炎などにより高い治療効果が期待できる。IPLは単一波長のレーザーとは異なり、波長の幅が広いのが特徴である。メラニンと酸化ヘモグロビンの両方をターゲットとすることが可能であり、また、コラーゲンにも作用し、しかもダウンタイムがないため、いわゆるフォトフェイシャルに有効である。さらに、設定により脱毛も可能である。

今後とも地域の先生方とは病診連携の充実を図り、大学付属病院のメリットであるマンパワーを活かした、時間や労力を費やす処置、重症患者の入院加療、あるいは手術症例に対処することが当科の責務であると心得ている。

○医局員

上野孝(うへのたかし): 講師、部長代理。鳥取大学卒業、東京医科大学大学院(形成外科)修了。皮膚外科が専門である。ビール大好き人間であるが、胃腸がそれ程丈夫ではない? 先だって、常人では



いつもさわやかな医局員一同

真似のできない方法で、2週間で6 Kg減量した。

高崎真理子（たかさきまりこ）：助教、医局長、愛知医科大学卒業。美容皮膚科について更なる習練中である。本人の弁では皮膚病理も好きな由。姉御肌かもしれない。面倒見がよく、後輩からの人望は厚い。医局長のため医局の雑務に追われている。比較的酒飲みであるが、基本的に肉が好きなので、魚好きの上野とは嗜好が合わない。

池田麻純（いけだますみ）：助教、医長。日本医科大学卒業。美容より一般皮膚科の方に興味があるらしい。大人数の外来患者にうまく対応する能力は見事なものがあり、予約患者を待たせることがない。その外見のためか特に中高年男性患者からの人気は絶大なものがある。お菓子大好き人間である。

山下裕子（やましたゆうこ）：助教、日本医科大学卒業。地元出身である。臨床面はもとより雑用に対しても如才なく振る舞う。プライベートでも良妻賢母なのだろうと皆に感じさせてしまうところがすばらしい。昨年秋に男児を出産した。おめでとう。

川原崎麻以（かわらざきまい）：専修医、いわゆる後期研修医である。東海大学卒業。旦那様が県西部に勤務されているので、湘南方面から通勤、新駅増設の恩恵を受けている。

尾見徳弥（おみとくや）：連携教授、クイーンズスクエアメディカルセンター・皮膚科部長。日本医科大学卒業、同大学院修了。美容皮膚科の専門家である。診療および医局員へのアドバイスのため週1回来院している。

横浜総合病院（横浜市青葉区）

OTTENS-藤村真美

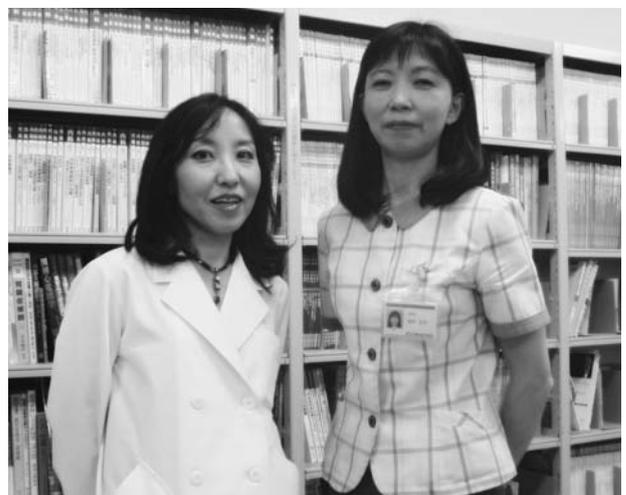
「若い世代が移り住みたい街」などというアンケート調査で、必ず上位に上げられるあざみ野駅からバスで10分。「子供を通わせたい学校」でもやはり名の挙がる桐蔭学園に隣接し、横浜総合病院は地域密着型病院として昭和51年に創立されました。院長の掲げる病院理念「心技一如」に基づき、最新設備による専門医療と、ハートフルな医療サービスを各科のスタッフが心掛けており、「よこそう」の愛称で親しまれています。

現在皮膚科は、筆者である常勤医が1人。週2コマの非常勤医とともに、外来業務を中心に小手術、入院加療も行っております。私は平成17年に就任いたしました。結婚、育児、海外滞在で長期ブランクがあったため、メガバイト級の不安を抱えての初出勤日、自宅を出たとたんバス停の石階段から転げ落ちるといふほろずっぱい思い出があります。膝から下を血まみれにして現れた私を見た「よこそう」上層部は、皮膚科の行く末にそれこそギガバイト級の不安を抱いたことでしょう。

未熟な1人医長を支えてくれたのは非常勤の先生方、地域の開業の先生方と、昭和大学藤が丘病院の

末木教授を始めとする諸先生方でした。おかげさまで無事現在に至り、毎日楽しく仕事をさせていただいています。

総合病院といっても、比較的こぢんまりとしていて、各科の医師同士の連携もスムーズです。合同医局も田舎の小学校の職員室のようで、私個人の感想を言えば、活気にあふれた明るい雰囲気のある病院。庶民的でちょっぴり古ぼけていて、昭和時代の商店街のような病院、といったところです。



医局秘書の田中さんと（左が筆者）

しかし、ほのぼのとしていてもそこは病院。経営に関してはなかなかシビアであります。月3回無言でデスクにおいてある「各科業績一覧表」。目標業績の達成率に応じて◎○△×がつけられます。これに加えて月一度の医長会ではなおさら詳しい業績の発表がなされ、最近の私は、自分の爪を観察しながらただじっと会議が終了するのを待っている有様。生来胃弱の私。きりきり痛が年中無休になりました。

業績アップのため何か策を練らねばと考えつつも、皮膚科の主業務である外来診療を日々大切にこなしてゆきたいとは思っています。意外と多いのが、セカンドオピニオンを求めて、しかしながら、脳外科行って、内科も寄って、ついでに「もう近くの先生に診てもらってるんだけど、薬これでいいの？」系の患者さん。疾患について図示して長々説明し、持参した軟膏に使用法を書いて、「……というように、今の先生のご診断も治療も完璧です。続けて診ていただいて下さいね。」と送り出し、皮膚科収入はゼロ！でも、少しでも多くの皮疹を見、少しでも多くの細胞を感じ、少しでも多くの解説を施して皮膚科医としての己を高める、という信念を貫こうと思います。

幸運にも私は、夫の転勤のため海外で医師として様々な経験を積むことができました。ドイツでは夏のビアガーデンで、頭上の新緑からぱらぱらとマダニが降ってきたり。タンザニアではアルビノの黒人、AIDSで口腔粘膜にびっしり発生したカボジ肉腫やBarkittリンパ腫の巨大腫瘍を見、自分自身がマラリアに罹ったりもしました。インドネシアでは Dengue 熱やチフスが風邪なみの疾患なのに驚き、その特徴的な症状と皮疹を見ることもできました。自爆テロの主犯者や、大津波の被害者、また内戦拷問による惨殺死体の剖検所見を見、人生観も変わりました。家族に囲まれて毎日を平穏に暮らしていけることが、世界的にも類のない安全な国に生きることが、どんなに幸せであるかを心にとめ、自分の経験を生かし、いつも笑顔で患者さんと接しようと思っています。そんなわけで、診療報酬が低かろうが胃が痛もうが私はけっこう楽しく、充実した外来ライフを満喫しているのです。



外来スタッフと（後列・岩田さん、田部井さん／前列・筆者、鈴木さん）



病院地図

大学時代から、結婚して海外に移住するまでを東京の下町で過ごした私には、横浜のハイカラな空気がとても気に入っています。垢ぬけているようで昔ながらの野山があちこちにあって、学生のころあんなに苦労して出かけた湘南にもあつという間。晴れた冬の日、丹沢の連山を従えて富士山が凜と姿を見せます。病院所在地の横浜市青葉区や近隣の川崎市麻生区は、高齢居住者の多さで全国上位の長寿区域です。当院にも非常に多くのご高齢の方が通院なさっており外来診療の合間には、いろいろ楽しいお話を聴くことができるのも楽しみです。お近くにお出かけの際はぜひお寄り下さいね。院内のセブンイレブンで淹れたてのコーヒーをごちそう致します。